土砂災害警戒区域の基礎知識

土砂災害警戒区域は、土砂災害（急傾斜地の崩壊、土石流、地すべり）から市民の生命を守るため、土砂災害の恐れがある場所の地形や地質、土地利用状況などを調査し、その結果に基づき奈良県知事から指定された区域です。

異常事態の発生に備えるためにも周囲の危険性をあらかじめ知っておき、正しい知識を持って冷静に行動できるよう日頃から備えましょう。

土砂災害の種類

急傾斜地の崩壊（がけ崩れ）

地面にしみ込んだ雨水などが土の抵抗力を弱め、弱くなった急ながけ地や斜面が突然くずれ落ちる現象です。地震によって起こる事もあります。突発的に起こり、短時間のうちにくずれたり落石があるので、逃げ遅れた場合、死者が出る割合が高くなります。

こんな現象に注意
- がけに亀裂がある
- がけから小石がパラパラと落ちてくる
- がけから急に水が湧いてくる

土石流

谷や斜面に溜まった土砂が、大雨による水といっしょになって、一気に流れ出してくるものです。破壊力が大きく、速度も速いので、大きな被害をもたらします。「山津波」とも呼ばれます。

こんな現象に注意
- 山鳴りや、立木がさける音がする
- 川が濁ったり、流木が混じり始める
- 雨が降り続いているのにもかかわらず、川の水位が急激に下がる

地すべり

地中の粘土層などすべりやすい面にしみこんだ雨水などの影響で、山腹がゆっくりと動き出す現象です。比較的緩やかな斜面でも起こります。一度に広い範囲が動くため、住宅や道路、耕地などに大きな被害をもたらします。

こんな現象に注意
- 地面にひび割れができている
- 地面の一部が陥没したり、隆起している
- 池や井戸の水が急に減ったり、濁ったりしている

土砂災害警戒区域（イエローゾーン）

「急傾斜地の崩壊等が発生した場合に、住民等の生命または身体に危害が生ずるおそれがあると認められる区域」をいい、詳細は下記のとおりです。

急傾斜地の崩壊（がけ崩れ）

1. 傾斜度が30度以上で高さが5m以上の区域
2. 急傾斜地の上端から水平距離が10m以内の区域
3. 急傾斜地の下端から急傾斜地の高さの2倍

土石流

土石流の発生の恐れのある渓流において、扇頂部から下流で勾配が2度以上の区域

地すべり

1. 地すべりしている区域または地すべりする恐れがある区域
2. 地すべり区域下端から、地すべり地塊の長さに相当する距離（250mを超える場合は250mの範囲の区域）

土砂災害特別警戒区域（レッドゾーン）

「土砂災害警戒区域のうち、急傾斜地の崩壊等が発生した場合に、建築物に損壊が生じ住民等の生命または身体に著しい危害が生ずるおそれがあると認められる区域」をいい、特定の開発行為に対する許可制、建築物の構造規制等が行われます。

最新の指定区域は市のホームページをご確認ください。

避難行動のポイント

土砂災害は突発性が高く、甚大な被害をもたらします。
上記の前兆現象は、経験則として土砂災害発生の前に感じられるものとして知られていますが、特に警戒区域内においては避難の猶予がほとんどないものと考え、「様子がおかしい」と感じたら、ただちに避難行動をとってください。

1. 土砂災害警戒区域内、また指定が無くとも「谷の出口」や「がけの下」からは、いち早く退避する。
2. 指定避難所までの移動が困難な際は、近隣の堅牢な建物の高層階へ避難する。
3. 外出にも危険が伴う状況で、やむなく自宅に留まる場合は、2階以上の出来るだけ山側から離れた部屋に移動する。

風水害時避難の心得

避難のポイント

正確な情報の入手

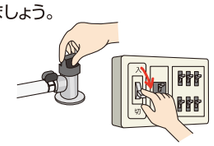
テレビ・ラジオ・ホームページで最新の気象情報などに注意しましょう。雨の降り方などに注意し、危険を感じたら自主的に避難しましょう。

車での避難はよく考えて

緊急車両の妨げにならないよう、また浸水の危険性も考えて車を使いましょう。避難所での車利用も可能になります。

避難する前の確認

避難する前に、電気・ガスの火などを消し、避難所の位置を確認しましょう。また、親戚や知人などに避難することを連絡しておきましょう。



要配慮者への協力

高齢者や乳幼児などは早めの避難が必要です。一人暮らしの人への声かけを行うなど近所の高齢者が避難する場合には、協力しましょう。

安全な避難路を選ぶ

避難はできるだけ高い道路を選び、水路などには十分注意しましょう。また土砂災害警戒区域を避けるようにしましょう。

万が一逃げ遅れたときは

万が一避難が遅れ、危険が迫ったときは、近くの丈夫な建物の2階以上に逃げましょう。

非常持出品の事前準備を

避難するときの荷物は必要最小限とし、事前に準備しておきましょう。

動きやすい服装での避難を

避難するときは、動きやすい服装で2人以上での避難を心がけましょう。

水平避難と垂直避難

風水害では早めの避難が重要です。ただし、すでに避難経路が浸水しているなど、危険が間近に迫っている状況での無理な避難行動はできるだけ避けなければいけません。

そのような場合は、避難所への移動（水平避難）だけでなく、近隣の高い建物や自宅の2階といった高い場所への移動（垂直避難）を行う判断も必要です。

また、土砂災害の危険性がある時は、屋内でも山と反対側に避難を行いましょう。

【土砂災害・風水害の避難行動判定フロー】

ハザードマップで自宅がある場所に色が塗られている
- はい → 被災の可能性あり。原則、自宅の外に避難が必要
- いいえ → 原則、避難の必要なし。停電や断水に備える

↓ はい

避難に時間がかかる人がいる
- はい → 警戒レベル3で避難
- いいえ → 警戒レベル4で避難

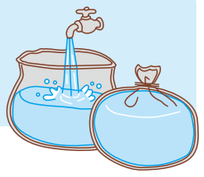
住宅の浸水被害を防ぐには

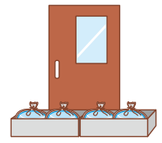
浸水深が小さいときは、家庭にあるものを使って、水の侵入口となるところを塞ぐことで水の侵入を減少させることができます。トイレなどの逆流防止にも有効です。

※実施の際には避難の妨げにならないように気を付けてください。

「水のう」の作り方

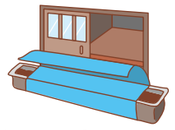
40L程度のゴミ袋を二重にして半分程度の水を入れる。空気を抜いて口をしばる





段ボール等に入れて並べる

長めの板状のものと組み合わせて止水板に



土を入れたプランターをレジャーシートなどで包むのも有効